

日本時間学会第3回大会を開催

ハイライト

- ・ 日本時間学会大会開催
- ・ 廣中名誉所長就任

目次：

日本時間学会大会を開催 お知らせ	1
・ 公開学術シンポジウム	2
・ 廣中元学長が名誉所長に 研究トピックス	3
・ 中国、生活の中の新暦 旧暦 所長室より	4
・ 共同的時間体験による 信頼システムの構築を 時間学ミニ辞典	4
・ 聖なる時間	4



大会後の記念撮影。多彩な顔ぶれです。

少し早い梅雨入り後の6月11日と12日、日本時間学会第3回大会が山口大学で開催されました。

日本時間学会の設立には山口大学時間学研究所が大きな役割を果たしており、これまで2回の大会も山口大学で開催されました。今回、はじめて関東地方で大会を開催しようと、千葉大学の一川先生が世話人となって準備を進めてきました。ところが3月の大震災で千葉大学も被災し、会場の確保などが難しくなってしまったのです。関係者には大変な判断でしたが、急遽、大会会場を山口大学に変更して開催となりました。

大会では、開会に先立ち、辻所長（日本時間学会会長）による文部科学大臣表彰受賞記念講演『東日本大震災と時間学』が行われました。時間学が公に認知された事の意義に触れられ、また今回の未曾有の大震災に対して時間学はいかに取り組むべきかといった提言がなされました。

大会の自由報告では、古代の暦に関する研究にはじまり、生物・医学的な見地の研究、心理学、リスク管理、地球・太陽活動から宇宙に至る

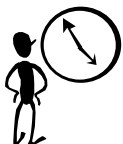
多彩なテーマで14の講演が行われました。この分野横断的な多彩さが日本時間学会の活動の特徴であり、参加者も自分の研究以外の分野について学び、また発想を得られることに意義を見出されているとのことでした。

今回の大会では、自ら日本時間学会の存在を知って学会に加入し、単身で発表に臨まれた講演者が複数いました。これまでの2回の大会の講演者のほとんどが、何らかの形で知り合い同士だったのと対照的であり、これは日本時間学会、また時間学という学問が少しずつ知名度を上げていることの表れではないかと思われます。

大会の会期中には時間学研究所主催の公開学術シンポジウム（下記）、日本時間学会理事会、同総会、さらに懇親会とその2次会・3次会までも開催されました。会期の2日間にわたって大きな問題もなく無事に終えることができ、大会の責任を引き受けられた一川先生、ホスト役を務めた時間学研究所一同ともども、今はホッとしているところです。お世話になった各方面にお礼を申し上げます。

時間学研究所ニュースレター第2号をお届けします。今回は時間学研究所がホストとなって開催された時間学会の大会の様子、また廣中元学長が名誉所長に就任されたことを中心にお届けします。坪郷先生、アラム・ジュマリ先生の記事も必見です。

《時間学研究所》
〒753-8511
山口市吉田 1677-1
TEL/FAX 083-933-5848
jikann@yamaguchi-u.ac.jp
www.rits.yamaguchi-u.ac.jp



公開学術シンポジウム



『時間体験の基礎—心理学、生物学、哲学からのアプローチ』

6月11日の午後、日本時間学会の大会に合わせて、時間学研究所主催の公開学術シンポジウムが開催されました。千葉大学の一川誠先生がコーディネーターとなり、心理学、生物学、哲学の3分野の講師による「時間体験」の講演が行われました。

心理学の分野では一川先生自ら、錯覚・錯視における時間体験の研究の最前線を解説されました。動画で示された錯視のデモでは、会場から「見える！」といった驚きの声が上がっていました。

生物学の立場から講演をされたのは熊本大学の桑和彦先生です。医学的な観点を交えつつ、様々な生物における時間の多様性について、また睡眠という現象と時間の関係について講演をされ、扱う題材の身近さと明快な解説で参加者の興味を引き付けていました。

「時間の非対称性と価値や幸福の問題」と題して哲学の立場から時間を論じたのは千葉大学の柏端達也先生です。特に時間の「非対称性」という側面に着目し、過去と未来における出来事が価値にどのような影響を及ぼすか、まさに哲学的なテーマとして説明されました（編集子が個人的に面白かったのは「アガスティアの葉」という仕掛けです）。

3人の講師による講演の後、壇上で互いに質問と応答をするパネルディスカッションがあり、異なった分野の相互作用的な意見交換も多くの参加者を魅了していました。

シンポジウムの最後を飾ったのは、蔵本由紀京都大学名誉教授による特別講演「非線形科学と時間」です。自



講演中の柏端先生

然界にしばしばみられる同期現象における先駆的な研究で有名な蔵本先生は、例えばホタルの発光における同期現象などを「時間領域における自己組織化」と表現されました。そして現実世界には様々な形や動きが満ちていること、それが不断に形成され、変化している事に注目し、そこに広く適用可能な法則や概念を見出していこうとする非線形科学の意義を語られました。

天気予報では雨だったにもかかわらず、参加者は140人を超え、会場となった人文学部大講義室がほぼいっぱいとなりました。講演後には参加者席からも様々な質問が出され、大変有意義で成功したシンポジウムとなりました。



廣中元学長が時間学研究所の名誉所長に就任

山口大学元学長の廣中平祐先生が時間学研究所の名誉所長に就任され、6月28日に任命式が行われました。廣中先生が名誉所長就任された背景、そして時間学研究所と廣中先生のかかわりについて紹介します。

そもそも時間学研究所は、1996年から2002年にかけて山口大学学長をつとめられた廣中先生の発案によるものでした。廣中先生は学長に就任されて以来、山口大学に新しい研究の芽を生んで伸ばそうと、様々な取り組みを行われていました。そのようなとき、理学部教授（当時）の井上慎一先生によって「時間生物学研究所」という提案がありました。これに注目した廣中先生は、生物学にとどまらず、より広い視点で「時間」をとらえてみてはどうだろうか、と逆に提案されたのです。そこ



廣中平祐元学長



学長室で記念撮影

には学際的で文理融合的な、新しく豊かな研究課題があるのではないか、そのような新しい研究を行う研究所を設置してはどうだろうか、というわけです。

.....

研究トピックス

中国、生活の中の新暦旧暦

人文学部 坪郷英彦

私は山口大学教育財団の日中大学間交流短期研修の機会を得、平成23年の2月から中国貴州省貴陽市にある貴州大学に滞在することが出来ました。1ヶ月の長期にわたって多くの貴州大学の先生と交流し、また少数民族調査を行いました。その中で歴法研究の第一人者張聞玉教授との交流と、生活する中で旧暦が多く使われていることに気づきました。そのエピソードを紹介したいと思います。

歴法研究の張教授は山口大学時間学研究所の第1回の国際シンポジウムが開かれたおり、来日され講演をされました。その時の感激を厚く語られたのが印象的でした。中国の暦の研究を行うには文献が基本になりますが、漢代以前の文献は非常に少ないようです。それを補完してくれるのが、少数民族彝族が書き写し残した古代の文献だということです。彝族の文化的中心地域は貴州省・四川省・雲南省が接するあたりにあり、その近くの貴州省畢節市に彝族の古文書を集めた文献センターを作ったとのことでした。私の弟子が勤めているから行ってみたいかと誘われましたが、調査計画を変更することが出来ず、お断りしました。今回の研修の中で唯一の後悔です。暦は国の支配の要であり、支配者が変わるたびに暦を変えたことや、彝族という少数民族の役割の重要性などを学ぶことができました。現在の天文学をベースにした暦についての意見もありましたが、私の中国語理解能力の限界で十分理解出来ぬままでした。

この張教授との交流が暦に関心を持つきっかけとなりました。学生と話す機会が多かったのですが、旧暦が毎

そして1999年、時間に関わる多くの研究者に声をかけて時間学の可能性について議論する研究会（林原フォーラム「時間と時」）を開催され、その成果は廣中先生が編者である著書『時間と時』にまとめられました。その中に廣中先生が書かれた「時間学研究所の発展を期待して」には、時間学の大きな展望と具体的な課題が力強く語られ、『時間学は時間の意味を浮き彫りにする諸々の研究と啓蒙と位置づけると、課題と可能性は無限である。』とまとめられています。この言葉は時間学の研究に携わり、時間学を発展させようとする所員の信念にもなっています。

このように、廣中先生は時間学研究所を設立されただけでなく、時間学に深い関心をもたれ、またその可能性に大いに期待を寄せられていました。このたびの名誉所長就任は、時間学研究所にとって本当に意義深いことであり、これを機に、より一層の研究の発展を目指さねばならないと、所員一同、決意を新たにしています。

日の生活に生きていることがだんだん解ってきました。携帯電話の毎日の日付表示には旧暦の日にとちと節が併記されています。新暦の1月1日より旧暦の1月1日を春節として祝っています。

ちょうど講義の場を設けて下さったので、どのように旧暦が学生生活の中に生きているかを知る為に簡単なアンケートを作り、講義の終わりに実施しました。

結果は別の機会に発表しますが、特徴的なことをここに書きます。20歳前後の学生はほとんどが、旧暦の節と祝日を知っています。新暦は世界とのコミュニケーションに都合が良いという理解で共通していました。一方、旧暦は農業や季節を知るのに適していることや旧暦の祝日に家族と時を過ごすことが大切なことだと書いている回答が目立ちました。特に春節の前日に家族が集まり食事をすることが楽しくて大切だと書いていました。

中国が大きく工業化を目指しているとはいえ基本としての農業がまだ根付いていることと家族のきずなを大切にしていることがよく伝わってきました。

アンケートの結果を先生や学生に話すと学生の間では誕生日を新暦で祝う学生と旧暦で祝う学生がおり、困ることがあるとか、何年か前のこと中国北部で春節前に大雪が降り列車が不通になった時に、駅に人が溢れたり、夜を徹して歩いてふるさとに帰ろうとしたのは、春節前夜に家族が集まるという慣例の為であったことも解りました。春節が休みならゆっくり帰ればいいと思うのは異文化の人間だけのようです。



所長室より

共同的時間体験による信頼システムの構築を

人間にとって大事な時間とは、何よりも生を得て死ぬまでの一生の時間である。人のもつ時間は有限である。だから人は長寿を願い、また死を恐れてもきた。宗教や思想などが存在してきたのも、この有限性の不安を復活や輪廻や空などによって超越する道を説いてきたからである。

だが、死への旅立ちを自ら選ぶ人たちがこのところ跡を絶たない。1998年に我が国で自殺者が3万人を超えたとき驚きをもって報じられたが、その後も減少しないので、2006年に政府は自殺対策基本法を制定した。この6月に発表された『自殺対策白書』によると2010年の自殺者総数は、3万1690人であったという。これで3万人以上の自殺者数が13年連続したことになる。

では何が原因で大量な自殺者が生まれているのであろうか。直接の原因としては90年代からのグローバル化により、企業、学校などのあらゆる環境で競争原理の激化が進み、失業や不安定な労働環境が増加し、生活が厳しくなり、その結果、人びとがますます孤立し、疎外感を感じるような状況が生じたことに関係していることは言うまでもない。その他では、国家財政の

赤字により、国の将来が不安定で、しかも今後激増する高齢人口により、少子・高齢化がより進むこと、若い世代も中年世代もいまや豊かな時代に生まれ育った人が多く、これからの日本の将来に明るい展望を持つことが困難になっていることも原因といえるであろう。人は、困窮や孤独などの状況に立たされたからといって、すぐに自殺に走ることはない。大概の場合、多くの人は耐えることができる。だが、将来への可能性に希望を託せなくなると、この耐性も維持できなくなる。加えて、個人化する中で、信頼のシステムが崩れてきたことの要因も大きい。こうした重層的な要因が自殺を引き起こしていると言っているのは良いのである。

その意味では、いま必要なことは、将来への見通しを指し示し、日本社会で崩壊しつつある信頼のシステムを再構築して連帯を取り戻すことである。共に生きているという共同的な時間感覚、そこからの信頼感の構築こそが必要なのである。

(辻正二)



時間学三辞典

【聖なる時間 (sacred time)】

「聖なる時間」とは、宗教学的な文脈の中で、主にエリアーデ (Mircea Eliade, 1907-1986) が比較宗教学の分析の際に用いた概念として、よく知られている。この概念には、「聖別」と「宗教的時間」という二つの側面が見られる。

聖別は、時間の“聖化による不均質化”を意味する。暦などを通して人間は、均質的・連続的な時間に対し、“聖なる意味と価値”に基づく区切りや序列的な構造を与える。それによって時間は、「聖なる時間」を基準または拠り所として、経験しうるものとなる。この「聖なる時間」が元来どのようにして選別されて文化的に定着するのかについては、①恣意的に決まる場合、②自然と向き合いながら人間本性的に決まる場合、③過去から受け継がれたシンボル構造(祖型)を参照して決まる場合、という相補的な三つの経路を、エリアーデは説いた。

一方の宗教的時間は、“宗教的人間の時間感覚”を指す。一言でいうとそれは、直線的・歴史的な時間に対する、円環的・儀礼的な時間である。「歴史」と「宗教」は、「時間を越えて表現(具現・復元・体現)される〈過去の〉人間生活」という意味においては、同類の実態を指す。そもそも宗教的な儀礼・教義・聖典の多くが、「過去の人間生活の再現」つまり歴史的資料そのものを本質的な内容としている。儀礼という宗教におけるも

っとも代表的かつ集中的な現れは、「歴史の実践」であるとも言える。しかし両者はそれぞれ、「資料」と「事実」をめぐる、本質的に相容れない時間的な性質を有している。歴史にとって資料とは、時空の枠によって現在とつなぎ合わされるべき実態であり、それがうまくかなえられたとき——またそれゆえに——一、事実であるとみなされる。一方の宗教にとって資料とは、時空の枠を超越した(時空の枠に縛られない)真理/真の事実/生のリアリティーが存在することを裏付けるもの、またはそうした事実を実現するための手がかりであるとみなされる。したがって儀礼において見られる「過去・祖先とのつながり」は、直線的・歴史的な時間や文化的な空間に対する、否定やそこからの脱却を、そのもっとも重要なエネルギー源としているのである。たとえば宗教儀礼において参照される神話・伝説・言い伝え等は、現在とは異なる古い生活を記念したり古いものから何かを学んだりすることを目的としているのではなく、それらがいま現在の生活を成立させるものとして、再現したり重ね合わせたりするということに意味がある。

(ジュマリ・アラム)